



2025・5・23

<展覧会 開催のお知らせ>

UNPEL GALLERY（アンペルギャラリー）は、運営母体であるあいおいニッセイ同和損保のメセナ活動として、全国の大学・美術大学と連携し日本画を学ぶ学生・卒業生に発表の場を提供しております。この企画は、日本画を志す若手作家の育成と共に、各地域の文化芸術の支援活動を通じてあいおいニッセイ同和損保の活動指針である「地域密着」を具体化する取り組みです。2月から始まったロングラン企画もいよいよエピローグを迎えます。7月26日（土）からは東京藝術大学日本画博士課程の佐藤 八弘、林 銘君、柳沼 花音、3名による展覧会を開催いたします。

■展覧会概要

タイトル	『間—現れる景』 ～第38回大学日本画展 <東京藝術大学日本画博士課程3人展>～
会期	2025年7月26日（土）～8月10日（日） 11:00～19:00（月曜定休・最終日17:00まで）【入場無料】
会場	UNPEL GALLERY 東京都中央区日本橋 3-1-6 あいおいニッセイ同和損保八重洲ビル 1F
参加作家	佐藤 八弘（さとう はっこう）、林 銘君（りん めいくん）、柳沼 花音（やぎぬま かのん）
展覧会内容	東京藝術大学大学院美術研究科 日本画博士課程に在学中の3名による展覧会「間—現れる景」を開催いたします。 本展は、例年日本画第二研究室の学生によって開催されてきましたが、今年は研究室の垣根を越え、日本画の3つある研究室から1名ずつが出品する初の試みとなります。 日頃異なる研究室で各々の表現を追求している3名には、それぞれが織りなす世界、すなわち「間」が確かに存在しています。「間」とは、空間としての間を意味することもあれば、人と人／物と物の間に生まれる、定まらぬ余白のようなものかもしれません。本展では、その意味合いを固定せずに多様な解釈をひらき、3人の個性と響き合いの深さをタイトルに込めました。 各作家の感性や作品への思いが一つの場所に集まることで、それぞれの世界観がより鮮やかに浮かび上がり、見る方の前に豊かに広がる、そんな景色をお楽しみいただけましたら幸いです。皆さまのご来場を心よりお待ちしております。
主催	東京藝術大学 大学院美術研究科 日本画研究室
企画	UNPEL GALLERY
協賛	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社

<ご連絡・お問い合わせ先>

ギャラリーオフィス 11:00～19:00 月曜定休（担当 / 井上・渡邊）

E-mail / tsubaki@unpel.gallery <https://unpel.gallery/>

TEL / 03-3548-7780 FAX / 03-3548-7781 * お問い合わせは E-mail にてお願いします

■作家プロフィール

佐藤 八弘 Sato Hakko

神奈川県出身

2022 年 東京藝術大学 美術学部絵画科日本画専攻 卒業

2023 年 東京藝大アートフェス「みずほ賞」受賞

2024 年 東京藝術大学大学院 美術研究科日本画修士課程 修了
日本美術院 再興 第 109 回院展 初入選

2025 年 東京藝術大学大学院 美術研究科日本画博士後期課程
第三研究室 入学 在学中
日本美術院 第 80 回 春の院展 初入選



「浮遊の記憶」
2025 年制作
1620 × 1620 mm
雲肌麻紙、岩絵具、墨、胡粉

神山財団芸術支援プログラム 第 9 回奨学生

【コメント】

日本画の精神性を軸に“記憶の想起”を伝統技術に落とし込みながら、
新たな表現を探究しています。

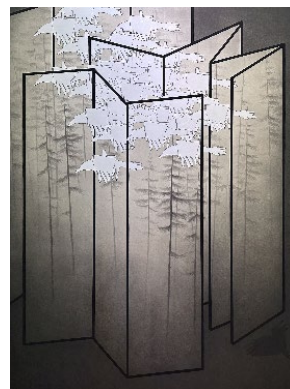
林 銘君 Lin Mingjun

中国出身

2019 年 中央民族大学 美術学専攻 卒業

2023 年 多摩美術大学大学院 美術研究科博士前期課程
日本画研究領域 修了

2025 年 東京藝術大学大学院 美術研究科日本画博士後期課程
第一研究室 入学 在学中



「浮舟」
2024 年制作
1620 × 1200mm
雲肌麻紙、墨、胡粉

【コメント】

身体を内と外を結ぶ媒体としてとらえ、曖昧さと持続的な流動の中にある
中間領域を描き出す。

柳沼 花音 Yaginuma Kanon

神奈川県出身

2022 年 東京藝術大学 美術学部絵画科日本画専攻 卒業

卒業制作 平成藝術賞、帝京大学買上げ

東京藝術大学大学院日本画第二研究室研究発表会

「素描展」以後 23' 24'

2023 年 守谷育英会 修学奨励賞

2024 年 東京藝術大学大学院 美術研究科日本画修士課程 修了

修了制作 Art の力賞

東京藝術大学大学院 美術研究科日本画博士後期課程

第二研究室 入学 在学中



「共生—巡る道—」(部分)

2023 年制作

1600 × 4800 mm

高知麻紙、岩絵具

【コメント】

日本画材でこそ活きる質感や構成や空気感、表現をできないだろうか
と考えて制作することを心がけています。